

4月10日：マルコス・E・P・コレイア氏のご講演の解説と、重要論点の抜粋

記載者：山崎圭一（yamazaki@ynu.ac.jp）

VER 1.3（4月20日）

（途上国経済講義で配布したバージョン1.2をさらに少し修正しています）

1 ブラジルの広さ

ブラジルは27州（ただし首都ブラジリアの連邦特別区を1と数える）あり、日本の23倍の大きさがあるのですが、コレイアさんはロライマ州など北部の3州を残して、すべて行かれたそうです。ロライマ州のボア・ヴィスタという首都は、最近急成長していて、注目の都市です。あそこは、大豆がとれるセラード地帯が、中央部の大セラード地帯からは離れてアイランド的に（孤島のように）あります。大豆は、ブラジルにとっては、外貨獲得の横綱が大関です。まさに大地の「金」。注目のロライマへの訪問経験がないというのは、ちょっと意外でした。

それにしても、それ以外は、ほとんどの州を訪問されたというのは、めずらしい方ではないかと思いました。普通のブラジル人がどの程度、国内を仕事で動くかはわかりませんが、コレイアさんはおそらくかなり多い方でしょう。

それぞれの州が「外国」だと思えるほど、風土が異なるようです。その実感として、ブラジルには27ヶ国あると感じたというのは、たいへん興味深いお話でした。なかなか、文献調査からは得られない印象です。

ブラジルでは州間移動は飛行機か長距離バスですが、頻繁だとそう飛行機は乗れないので、バスになります。コレイアさんもバスを使うらしい。州間ハイウエーの道路舗装はすごくよくて、綺麗ですし、長距離バスはわりと立派です。しかし、バスでの長距離移動は大変です。これと比べると日本への30時間以上の飛行機の旅は、食事もできるし映画もみれるし、ラクだとおっしゃてました。

2 マクロ経済

ブラジルは1994年までは年間3000%のインフレがある状況でしたが（毎年それほど高かったわけではない）、それ以降インフレがぴたりととまり（「為替アンカー政策」が奏功）、ビジネス環境が好転しました。これ以降、自動車ローンなど消費者ローン、クレジットカードなどが普及しはじめたのです。ローンは、インフレ下だと、「借り手は得、貸しては損」ですね。100万円借りたとして、1年後に物価が2倍になったときに、100万円を返せばよいのだから、実質返済は半額ですむ。

むろん、物価上昇率にあわせて債務をインデックス化して（注）、調整する場合もありますが、調整が遅れると実質債務よりも少ない額の返済ですむ。逆に調整が実質よりもすすんで、実際の負担よりも多く返済させられることもあります。だいたい、実質のインフレ率は誰にもわかりませんから（サンプル商品の価格調査によって算出された統計値と実態は乖離）、インデックス化（価値調整）された債務が実際の物価上昇率よりも高いか低いかは、誰も知るよしがない。細かい議論は横に置きます。

注 物価スライド制ともいう。ブラジルではコレソン・モネタリアという通貨価値修正の制度があった。これがインフレを慢性化、慣性化させる原因でもあった。日本の年金は物価スライド制になっている。1990年前後のブラジルの環境と、日本の現在の環境は、異なるので、単純にこの用語の訳はこれという風に一致しないかもしれない。私の専門は財政だが、日本の「地方交付税」とブラジルの「参加基金（fundo de participação）」は、似ているが、異なる点もおおい。専門用語の訳出はむずかしい。へたに訳さず、そのままカタカナ表記しておくのが、無難かもしれない。

とにかく、ハイパー・インフレ下だと「借り手は得、貸しては損」。だからクレジットは普及しない。供給側がいやがる。インフレが止まると話は逆。だから、ローンとくに自動車ロー

ンが普及したんです。それで、ポンコツ自動車が一掃された。そのことを、実感をもって話しておられました。数字ではなく、「実感」で話された点が貴重でした。数字だと、信用できない。統計が間違っている可能性があるからです。

ブラジルで「ポンコツ自動車が一掃された」というのは、実に、マクロ経済の話なのです。

レアルは対ドルで2.16から2.01まで上昇しました。レアル強しです。これは、輸出企業には厳しい。ブラジルから電話された奥様が、開口一番「あなた元気？」ではなく、「あなたレアルがまたあがったわよ」だったというのは、おもしろい。さて、問題。日本を旅行中のブラジル人にとって、これは、good newsか、bad newsか？これはドルも含めての計算でしょから、なんともいえませんかね（上級者向け）

3 クリチバ市の福祉行政

講演講師は、エコロジカル・シティとして世界的に有名なクリチバ市の、福祉委員会委員長です。福祉委員会は、ポルトガル語で conselho municipal（住民審議会とか住民評議会とか訳してます）といい、住民参加の方式です。福祉、教育、公衆衛生、環境など、いろいろな分野で設置されます。ブラジルには2001年の統計で5560の基礎自治体（日本の市町村および東京都23特別区にあたる）がありますが、たとえば教育審議会はその73.2%（4072団体）に設置されています。保健は97.6%、環境は29.1%です。福祉委員会の統計は手元にないのですが、その中身はほとんど知られていない。今回、クリチバ市のような世界的に有名な都市の福祉委員会の委員長から、直接実態を伺えたのは、願ってもないことで、学術的に有益な講義でした。

まず、交通費や手当はなしとのことで、完全なボランティアとのことでした。すると欠席者もでることでしょうが、実際に会議の欠席者も多いとのことでした。しかしせめてもしょうがないので、次回への出席に期待するそうです。コンセリョ・ムニシパルは、名前からは理想的な草の根住民参加システムなのですが、地方行政の実態をうかがってたいへん興味深かった。とはいえ、欠席者がいても、ぼちぼち制度が持続していることが重要です。むしろ無償なのに出席者がいることが、すばらしい。これはコレイア委員長の人徳にもよるのでしょうか。数千ある審議会の中には、事実上崩壊しているところもあるのかなあ、という疑問も持ちました。でもこれは調べてみないとわかりません。

福祉委員会の仕事としては、衣食住のうちの「衣」と「食」の貧困地区での配給とのことで、古着や余った食事をわけてあげるそうです。とくに「食」は痛んだものをわけることはできませんので、夕食後夜の10時くらいに、食事が傷まないうちにスラム地区に一人で運んでいくそうです。危険きわまりない。われわれがブラジルのスラムに夜10時に一人ではいって行くことは、富士山の樹海に夜行くようなもので、ありえません。しかし、目的（食事の配給）と行き先を明確にし、かつスラム地区の利権にふれなければ（販売網をくずすと）、安全とのことでした。護衛がついてくれるそうです。地区にはいると、どこかで誰かがモニターしているとおっしゃってました。

何十人殺人しているような若者でも、お母さんには絶対服従らしいです（逮捕されずに普通に暮らしていることが、驚きですが、ブラジルの実態です）。知られている話ではあるが、あらためて直接うかがうと、臨場感がありましたね。

4 治安について：

マリンガ市（これもパラナ州の有名な都市）からロンドリーナ市（パラナ州）まで、100kmあるのですが、自動車をとばして、途中である一家を乗せてあげた。しかし、泥棒で、コレイアさんを盗もうとしていたらしい。怖い話ですが、車中で話をして説き伏せ、無事自分で自分を解放された。話せば通じるところがあるのも、ブラジルの泥棒の特徴で、私モリオのビーチで違法な靴磨きの男に追いかけて回されたとき、最後に役立ったのは、逃げたり、けんかしたりすることではなく、しんみり本音で話すことでした。これがいつも通用すると、安心し

てはいけません。ヒッチハイクの人を乗せたりしないことです。

彼の自動車（VWのコンビというワゴンのような型）も、盗難にあったそうです。自動車の盗難はたいへん多い。

5 交通、ブラジルらしさ

ブラジルは鉄道もあるのですが、リオドセの鉄道など貨物用が多い。長距離の移動は飛行機か、道路です。道路を使う場合、時間の目算は、100kmの距離を1時間と計算するらしい。これってすごい話です。実質的に平均100km/hで走れるわけですからね。瞬間時速ではなく、「平均で」100km/hの速度で飛ばせるというのは、日本人からするとすごい話です。大陸です。私もサンパウロの大手グローバル企業（日本企業）の社長さんをぞんじあげてますが、工場まで100km、自動車で1時間くらいで、移動されています。

ところで、今回日本で精力的にアポイントメントをこなしておられますが、一日にたくさんのアポをいれても、すべて時間通りにこなせるのは、すごいことだとおっしゃてました。電車など交通機関が時間通りに動いている。その他、すべてのシステムが時間通りで、歯車のようになっていますが、それは反面で怖いことです。ブラジルでは、少しどこかで狂っても、うまくつつまがあう。日本ではその余裕がない。コレイアさんは、触れられませんでした。彼が感じた怖さは、すでに現実のものとなっています。2005年に、JR宝塚線（福知山線）尼崎駅手前での列車脱線事故で107名の乗客がお亡くなりになりました（負傷者500名以上）。この痛ましい事故のことは、記憶に新しい。わずか数十秒の遅れを取り戻そうとした運転手が、カーブでスピードを出しすぎたことが原因でした。この問題は、一方でJRの過酷な勤務体制や労務政策や規制緩和が原因ですが、他方で日本社会の時間の完ぺきさという事情も原因でした。

ブラジルらしい時間の余裕やこれまでのブラジル社会の良さが、昨今のグローバル化でなくなりつつあると、おっしゃてました。これは興味深い証言です。あの個性あるブラジルに、ついに国際標準が浸透しつつあると現地の僧侶（コレイアさんは仏教寺院の住職）が感じておられるということは、おもしろいことでした。

6 環境

ブラジルには10年くらい前から（10年が正しいかは自信ない）、環境保護弁護士（advogados ambientais）がいて、HPもあります。私は注目してきたのですが、その実態はわからなかった。今回、コレイアさんから具体的な話がきけて、これもたいへん重要な情報でした。ある環境弁護士は、ここ数年で仕事が増え、事務所も立派になったとのこと。こういうミクロな実感に基づく情報は貴重で、HPからは得られない。ブラジルでも、リオの環境サミット（92年）から15年たって、ようやく環境意識が高まってきたようです。次回渡伯する際には、この弁護士さんを是非取材したいと思いました。ところで、あの環境サミットは、ブラジルにとっては一体何だったのかなあと、ふと思いました（私も公式参加した）。

7 宗教

ブラジルはカトリックを国教とする国ですが、とくに理由なく、親がそうだからカトリックだという人も多いそうです。みなさん、神に対してそれほど信仰心があるわけではないとのことでした。

「解放の神学」（liberation theology、ポルトガル語ではteoria da libertação）（注）は、その貧者支援の社会活動自体は立派で、否定されるべき内容のものではないが、最近では巨大化し、ビジネス化している面が目立つとのことでした。また神学としては、旧来のカトリックの教義と変わるところはなく、カトリックの保守派を批判して生まれたカトリック内部の新しい運動だとのことでした。今では、病院を経営したり、福祉施設を経営したり、かなり巨大な経営体に成長しているそうですが、もはやビジネス化しているのかもしれない。世界でもっとも進

歩的なカトリックと評されるブラジルの「解放の神学」ですが、その実態の一端（あくまで一端でしょうが）を伺えたことも、重要な成果でした。

注 「解放の神学」にたいして、カトリックの右派からの批判や抵抗がブラジル内部で生じました。「解放の神学」は北部のペルナンブコ州で60年くらい前に生まれました。北東部のレシフェとオリнда（ペルナンブコ州）の大司教カマラの指導で、基礎教育運動が1950年代から展開したのです。

理解して覚えよう（解説は省略）

- ・為替アンカー政策
- ・インデックス化（インフレ論での）、通貨価値修正、コレソン・モネタリア
- ・クリチバ市の環境政策